

事務局 津田尚美 TEL

編集 岸本桂子 TEL

「ボーヴォワール、自身を語る」

上映会を終えて

宮本圭子

逐次刊行物
74. 3. 15
国立女性教育会館
女性教育情報センター

年に一回、人間として共感できる人から、いい話を聞こう——いい話とは女の問題を新しい視野で前向きに提起してくれること、これが、私達の文化講演会の基本です。才一回は、今は亡き野呂邦暢さん。才二回は、元ベ平連・現浦和市政の小沢遼子さん。昨年は、テレビルポライター渡辺まきさん。いづれもBWの会ならではの生き生きとした講演会でした。

ここ数年、いつそう活発になった「女性学」の動き、アメリカのウーマンリブの創始者、ベティ・フリーダムの来日や、フェミニズム国際会議など、地方に住む者にとっても、いさゝか無念の思いすらするニュースが続いていました。今年は、国連婦人

の十年折り返し年、国際的視野でフェミニズムを考えてみよう、ボーヴォワールは招へなくとも、映画なら、映像と肉声を語ってくれる——、かくして、「ボーヴォワール……」上映が才四回文化講演会となりました。

「ボーヴォワール?、長崎なら、マ、フェミニズム集まればいいでしょうなァ」との某氏の予想をみごとに裏切り、当日は、四百人余りの人達が来場。冒頭、映写機トラブルにも耐えて見てくれました。

映画は、知性と共に、斗い抜いた「女の真実」が、あます所なく語られ、その豊富な問題提起で、会場を圧倒しました。

フェミニズムとは「女の問題を、他の問題に従属させないこと」と、ボーヴォワールは定義づけています。次回例回での論議が大変たのしみです。

日邪をおして、かけつけを下さった鎌田政博、後援を心よく受けて下さった日仏文化クラブに、深く御礼を申し上げます。

『生きる欲望、すくまじく』

女も持ちたい』

映画を見て——中村紀代美

ボーヴォワールの映画は、正直いって難しいと思
いました。しかし、画像から受けたボーヴォワールは、
七十歳とは思えぬほど活々活々として、迫力があ
りました。自分自身を語るというのは非常に難
しく、勇気のいることだと思えますが、ボーヴォワールに
は、自分の身の確固たる生き方があり、思うように生
きて来たという自信がたいなものか、誰との会話
からも感じられました。

しかし、サルトルとの会話は少し違っていた様
な気がします。二人の間は冷静なまでに冷静であ
り、びくつくほどの個人対個人であった。何と
表現したらよいかわかりませんが、とにかく二人の
関係には、すごく興味がありました。そして、書く
ことについて、二人が議論し、ボーヴォワールの答えに、

サルトルが「まさに、ぼくの思っていた通りだ、いや
どうもありがとう」。ボーヴォワールも又「私の方
こそありがとう」と言っているところでは、感動
しました。私には経験の少ない、男と女の会話
であり、崇高な響きがしました。

女性運動について、「社会の正しい進化は、男と
女の機会の平等によって知られる」というマルク
スの考えに、ボーヴォワールは同意しました。

生きる欲望、すくまじく』を、女も持たなければ
ならないと思えます。

何のたりに生きていくのか、最近は何の面から
いろいろ考えるようになりました。又、今後、
これを良き機会に、ボーヴォワールの作品を、読み
読んでみたいという気持になりました。

——映画アンケート結果報告——

見野 美晴

総数十九枚——これは当日入場者数三九五、

の48%にあたる。少ないこの数値から入場者全体を展望することはできないが、こんな人が映画を見、こんな感想を持ったという例として、アンケート結果をみてみたい。

① 当日の会場の様子からでもわかるように、女性を中心に、20代が最も多く、年配の人の姿も見られ、職業では、教師、学生、会社員、主婦など、様々な年代の、様々な立場の人が見てくれた。映画上映を知ったのは、ポスター、チラシ、新聞の順で、ラジオ、テレビという人は少なかった。

友人からというものが多く、会員の努力が伺われる。③ ポーヴォワール著作は、「オニオニ」が圧倒的に多く読まれており、実存主義作家としてよりも「オニオニ」を書いたポーヴォワール」として知られているようである。

④ ポーヴォワールの生き方については、

『女性として、社会的にも、自分自身、内面的にも責任をもって発言し行動し、言行一致という』
『自分の思想に基づいて自分自身の生き方を、
十分につかんでいる。』

『行動的で、自ら選択し、人生に立ち向かう姿勢が素晴らしい。』 など、ほとんどの人が彼女
の自己確立し、積極的に生きようとした姿に共鳴
している。

最後に、映画をみて良かったと、多くの人が答えている。アンケートだけでなく、大きな反響があり、この度の映画上映に様々な反省はあるものの、「見てよかった」という人がいるということは嬉しいかぎりである。

「モア」の座談会に出席して――

花房 知子

女性雑誌「モア」(東京集英社)より、粘液観察法についてこのインテグラー、及び座談会の依頼があり、去る二月二十四日、加藤泰智子さんから詳しい説明の後、BW会員八名、女の会三名で、座談会の場がもたれた。

これは「モア」の特別企画「女からだシリーズ」の「避妊」の一つに加えたというもので、BW会の

「粘液観察法」の情報源は、読売新聞 清野博子さんの記事「女、からだし」であった。

座談会は、粘液観察法が、実際どのようなように使われ、生かされているか、という会員の体験談で始まり、女が自分の体のしくみや、生理について知ることの必要性や、女の側からみた避妊の知識や考えなどが話し合われた。

これまで、女性には自分の体について様々な疑問を感じながらも自由に話しあえる場が少なく、また女性の生理やセックス等については話題にするこゝとすらタブー視されていたが、真剣に考えこゝからこゝも仲間と、まじめに意見の交換をした、と思ふ。BW会員の間で、ごく自然にこゝうこゝう話題について話しあえるようになったことを、こゝれこゝれ思うと共に、「サのノート」作りや「粘液観察法」の反響が大きく、一つの活動が次々と輪を広げてゆく喜びと、その責任の重さを感ぜる。「女、からだし」の問題は、「粘液観察法」の勉強で終わらなかつたのではなく、今後、その実践によつて、より充実させたいものである。

お知らせ

★ 才33回婦人週間、長崎のついで

とき、4月11日は10時30分～15時30分
ところ、長崎県勤労福祉会館（桜町）
テーマ、「あらゆる分野への男女の共同参加」

「分科会」

1. 家庭で
2. 職場で
3. 地域社会で
4. 教育で

↓ 分科会報告
全体討議

★ 佐世保で「ボーヴォワール」上映

とき、4月12日（日）2時、4時半、7時の
ところ、労働福祉センター
主催、目覚め時計
800円、託児あり、
三回上映

④ ボーヴォワール、こゝれこゝれまでした。
うあ！春です、花の季節です、おかけましょ。
（サレ房）